

秋田大学医学部附属病院透析センターにおける 過去10年間の臨床統計

秋田大学医学部泌尿器科、秋田大学医学部附属病院透析センター*

赤尾利弥、佐藤陽子*、小林浩悦*、阿部明彦
浅利 泰、和田 仁、立木 裕、下田直威
佐藤 滋、小川 修、加藤哲郎

Dialysis at Akita University for Last 10 Years

Toshiya Akao, Youko Satoh*, Kouetsu Kobayashi, Akihiko Abe,
Yasushi Asari, Hitoshi Wada, Yutaka Tachiki, Naotake Shimoda,
Shigeru Satoh, Osamu Ogawa, Tetsuro Kato

Department of Urology, Akita University, School of Medicine, Akita

*Center of Hemodialysis, Akita University Hospital, Akita

秋田大学医学部附属病院透析センターにおける過去10年間の透析実績について報告し、最近の透析の動向について考察した。

患者数は平成元年の66名（急性疾患20名、慢性疾患46名）から平成10年まで68名（22、46）、66名（22、44）、76名（22、54）、77名（33、44）、60名（20、40）、69名（16、53）、76名（13、63）、52名（8、44）、61名（9、52）と60から70名と平均して推移している。内訳では急性疾患が減少していた。（図1）

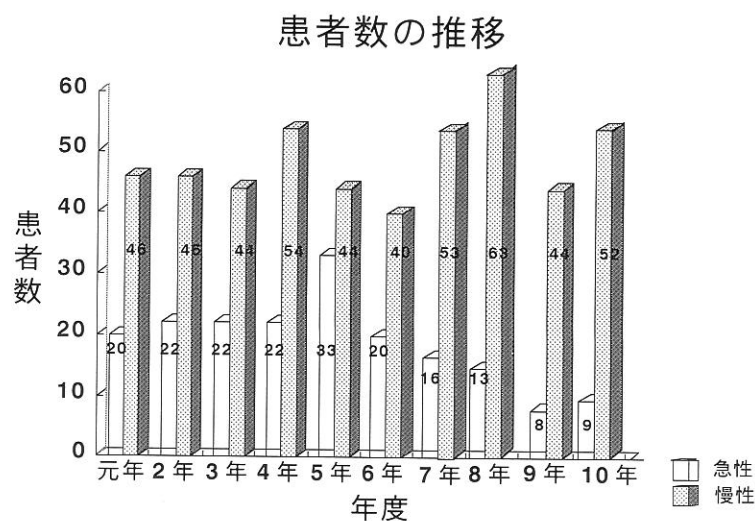


図1

血液浄化別の患者数では、HDまたはHDF施行患者が50名から60名、CHDFまたはCHF患者が5名から10名、血漿吸着も5名から10名とやはり平均して推移していたが、毎年5名前後であった血漿交換施行患者が平成9年1名、平成10年は1名もいなかった。(表1)

血液浄化別患者数

	元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年
HD,HDF	53	57	58	66	61	50	61	68	52	50
ECUM							13	10	1	8
CHDF,CHF		3	5	10	10	3	3	4	5	6
PE	4	8	3	5	5	4	3	5	1	0
DFPP,DHP	7	6	3	4	7	7	10	10	3	7
その他	8	7	4	1	3	5	5	2	10	4
計	72	81	73	86	86	69	95	99	72	75

表1

血液浄化別のべ施行回数ではHDFが平成4年までは年間400から500回であったが、その後徐々に減少し、平成8年から10年は年間250から300回であった。これは長期維持透析患者などの適応症例が少ないこと、血液浄化が多岐にわたり、また重症患者も多く、手間のかかるHDFを敬遠しているなどの大学病院の特性が影響していると考えられる。血漿交換も患者数と同様に平成6年までは20から30回年間行われていたものが、平成9年3回、平成10年はなしと激減している。これは救急部の設立によりICU施設が充実し、肝不全などの重症患者の血漿交換がICUで治療されるケースが増えているためと考えられた。

特殊血液浄化患者数は、神経、免疫内分泌疾患の血液吸着は3名から5名と平均しているが、やはり肝不全や多臓器不全患者数が減少しており、やはりICUの充実の影響がみられる。

他の国公立大学血液浄化部門と比較すると、平成9年度実績で秋田大学は血液浄化総回数で第5位、予算措置で独立した透析センターを持つ大学を除くと第1位であり、我々の積極的な取り組みが評価される結果となっている(表2)。血液浄化種別施行回数ではやはり血漿交換が他大学と比較すると非常に少ない結果となっていた。

国立大学血液浄化部門比較（平成9年度）

	ベッド数	血液浄化総回数
金沢大学	12	4008
長崎大学	10	2633
新潟大学	10	2545
信州大学	7	2464
秋田大学*	9	2239
浜松医科大学*		2188
琉球大学	7	2135
京都大学	25	1782
東京医歯大学*	10	1694
九州大学	4	1601
平均 予算措置	10.2	2135
学内措置*	8.3	757

表 2

以上の実績をふまえ、透析センターの予算措置施設としての独立を目標に今後も積極的に血液浄化に取り組んでいきたいと考える。